

現地実態調査結果

犬猫以外の哺乳類を扱うブリーダー【アニマルハウスももれっぶ】

フクロモモンガ／爬虫類ブリーダー（展示販売会「とんぶり市 2023」の出展者）

○現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

【イベント時】

- ・フクロモモンガは、プラスチックのケージに1匹ずつ入れる。ケージの中に柔らかい布でできた寝袋を入れておくとそこで休んでいる。柔らかい布でできた寝袋は、シェルターとして、普段もケージの中に入れて寝ている。展示スペースが寒い場合には、プラスチックケージの下にベルト状のヒーター半分敷いて温度を調整している。ベルト状のヒーターは夏場も冷房が効いていると寒かったりするので使うこともある。
- ・もぐってしまったいたり、エサを食べない時には寒がっていると思う。
- ・フクロモモンガと爬虫類を棚ごとに分けてお互いが見えない様にしている。トカゲとヘビの並びは特に配慮をしていない。
- ・展示販売するフクロモモンガは、脱糞 40 日以上がすぎ、40 g 以上の離乳した個体としている。
- ・フクロモモンガは、家を出るギリギリまでは常に餌と水を取れる状態になっている。展示している間は水の代わりにゼリーを入れている。到着いたときにミルクをあげて、途中、お客様の要望で出して遊んだりした後と、帰る前にミルクをやっている。
- ・フクロモモンガも爬虫類も糞があればその場ですぐ取る。
- ・フクロモモンガは、前の日の爪切り時に状態をみて悪ければ連れて行かない。会場でも興奮している子はどうも緩くなったりするので、その場合には販売スペースから下げる。まずはうんちの様子で、あとは毛ツヤや尻尾がふにゃんとなったりするので、それで判断している。
- ・爬虫類、哺乳類それぞれ展示しているケースに入れて、もう一つのケースに揺れない様に並べて入れるが、爬虫類と哺乳類とは別にして、長距離の時は途中で目視確認する。

【イベント以外】

- ・フクロモモンガは、家では高さ 60cm くらいのケージがあって、鳥かごの高いようなものを使っている。その中にペアで入っている。今は繁殖しないように

しているので同性や親子ペア。親子だと小さいころから一緒であればオス同士でも喧嘩はしない。

- ・フクロモモンガは夜行性のため、昼間はケージのある部屋をカーテンで遮光している。
- ・餌は夜一回あげるのと、他には24時間の置き餌がある。置き餌はカリカリで、夜ご飯は果物や野菜などのなまもの。
- ・フクロモモンガのケージは、毎朝必ず下部分のトレーを外して掃除する。
- ・フクロモモンガは、オスメスを一緒にいさせると、通常年に3, 4回産む。早ければ1歳前から繁殖可能で、6, 7歳でも繁殖する個体はある。見ていると出産のタイミングや回数などは自分で調整している様子。段々年々産まなくなったり、若い頃は2匹ずつだったが1匹ずつしか産まなくなったりする。年に4回生むのは2, 3歳までで、それ以降は少なくなっていく印象である。子育ての時にイライラしている場合はオスと離したりしている。
- ・基本的には親が慣れていないと子モモンガも人間に慣れないので、1日1回は遊ぶようにしている。1時間程度遊べるのなら遊んであげるといい。



フクロモモンガ 販売展示

犬猫以外の哺乳類を扱う観光動物施設【施設A】**○施設の運営について**

- ・動物種：クマ、チンパンジー、ウマ、ポニー、ヤギ、ミニブタ、ウサギ、モルモット、チンチラ、リスザル、ウシ、ビントロング、カンガルー、ヤマアラシ、アルパカ、カピバラ、ラマ、爬虫類等
- ・動物担当スタッフ数 30 名程度

○現状について（その他哺乳類）

- 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
- ・温度管理は動物毎に対応している。寒さに弱い動物は 10℃を下回るとエアコンやストーブ等を付けて管理している。暑いときはモルモットには保冷剤を床に引き、クマは水浴びをしている。
 - ・ウマ等のコンクリートの床には、ゴムマットやおがくずを敷いている。カンガルーは木の床にしてクッション性を配慮している。
 - ・クマはコンクリート床の掘り込み式の空間になっていて、壁の小さな穴をくぐると自由に寝床に行くことができ、日差しを避けられる。寝床に行けないエリアもあるため、日よけの設置を検討計画している。
 - ・クマエリアの清掃は毎日上からホースで水をかけて洗い流す。エサは朝と午後。飲み水は検査済みの地下水を活用。
 - ・クマの繁殖はゴールデンウィーク後に行っており、出産を控えたメスのクマのみ秋にしっかりとエサを与え冬眠させる。
 - ・2 歳くらいまでの子グマはアクリルの囲いのエリアにて展示している（寝室は別）。木の遊具はスタッフの手作り。
 - ・いろいろな動物との触れ合いをやっているので、展示だけの動物園よりは動物の頭数に対するスタッフの数は多いと思う。エリア毎に担当者がいる。
 - ・モルモットの触れ合いは、人が多いときはタイマーを使い 1 分間としている。触れ合わせるモルモットも順番に変えて出すようにしている。1 日 2 回の触れ合いタイムがある。触れ合い時間以外は展示のみとしており、上に網をつける。
 - ・ウサギは抱っこされるのが苦手なため、ケージの中にいる状態で触ってもらうのみとしている。
 - ・ヤギエリアの触れ合いはスタッフが離れているが、ヤギが嫌であれば逃げ込めるように観覧客の立入禁止エリアを設けている。
 - ・茶色いアルパカは芝生にヒモでつながれているだけなので隠れられる場所はな

いが、人が好きでおとなしい性格であり問題も起きていない。(個体の性格に合わせた展示、ふれあいを行っている)

- ・触れ合いを主としている施設のため大型肉食獣はいない。園内はクマ(雑食)、草食獣、トリ等、種類ごとに分けて動物を管理している(展示を行う際のみ、別の種が同じエリアにいることもある)。寝室に入ると他の動物が見えないようになっている。唯一、先住のビントロングから見える範囲にカンガルーの施設があるが、慣れたためお互い気にしない(寝室に入ればお互いは見えない)。



クマエリア（掘り込み式）



クマエリア（個別管理用）



アルパカ（柵有）



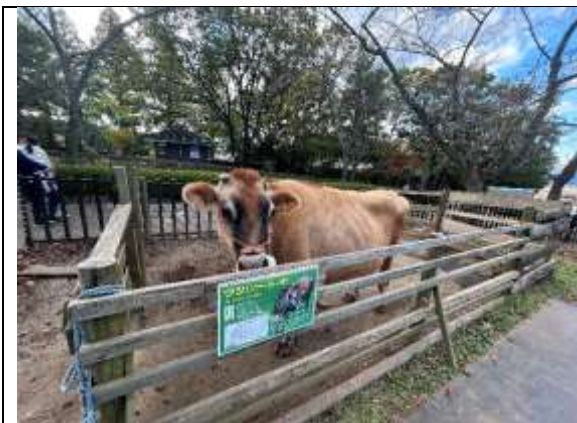
アルパカ（触れ合い）



チンパンジーエリア



ヤギ（触れ合い）



ウシエリア



ミニブタ (レース)



ヤマアラシ



ラマエリア



リスザルエリア



馬舎



ポニーエリア



カピバラ (触れ合い)



ピントロングエリア



カンガルーエリア



チンチラエリア



モルモット（触れ合い）
（触れ合い時でない時間帯のため、
DO NOT TOUCH と記載）



ウサギ（触れ合い）

犬猫以外の哺乳類を扱う観光動物施設

【株式会社モンキーエンタープライズ（施設名：おさるランド）】

○施設の運営について

- ・ 入園料（大人）2,300 円、（こども）1,100 円（シニア）1,800 円
- ・ 営業時間 10:00~16:00（土日祝は 09:00~16:00）
- ・ 動物種：サル、ヤギ、ヒツジ、ウサギ、モルモット、カピバラ、ネコ
- ・ アニマルショー動物種：サル

○現状について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

【触れ合いコーナー（ヤギ、ヒツジ、ウサギ、モルモット）】

- ・ 飲用水は地下水で、ごはんは常に牧草があるほか、顧客がエサを与えられるように置いてあるので、それを食べる。
- ・ 雨風をしのぐためのシェルターとして木製の小屋を設置し、そこで休めるようにしている。バックヤードはなく、そこで常に飼養している。
- ・ 監視は 1 名を配置している。飼育員は触れ合う前の手洗いの指導をおこなう。

【触れ合いコーナー（ネコ、カピバラ）】

- ・ ネコ、カピバラは同じ棟で飼養しており、カピバラはオス 2 匹、メス 1 匹、子 2 匹いる。子が避難できるように、シェルターとしてクレートを設置している。
- ・ カピバラはプールを用意し常にお湯に浸かれる状態にしている。
- ・ 水桶に飲用水を常備し、ごはんはペレットと、根菜類、アルファルファを与える。そのほか、顧客がエサやりもする。
- ・ 夏、冬は温度を調整している。夏は冷風機を設置している。
- ・ 逸走防止措置として二重扉と網を採用している。

【触れ合いコーナー（赤ちゃんサル）】

- ・ 赤ちゃんのサルを飼育員同伴で触れ合いコーナーに置いている。赤ちゃんの年齢は 4 か月～1 歳前くらいまで。常に飼育員が監視し、必要あればすぐに引き離す等の対応ができる。人間とサル双方の安全を踏まえてこうしている。
- ・ 赤ちゃんは朝、昼、夕の 3 回ミルク休憩がある。
- ・ 1 頭当たりの触れ合い回数の上限はないが、交代制であり体調を優先している。

【サルの展示】

- ・ 登れるような木の棒や、スイングするようなおもちゃを設置している。顧客と触れあうことがないように、施設と観覧スペースの間には 1m ほど距離があり、

手を出したりしないように穴は小さくしている。

【バックヤード】

- ・ ケージサイズは、昔は条例上一頭あたりの規定が1m×1mだった。当施設ではもう少し広め。登る習性をもつため、運動できるような高さが重要である。金網としている。
- ・ トレーニングは1～2歳から開始する。もう少し大きくなったらエンターテイメントとしての訓練をはじめ。
- ・ 個々のサルには特定の担当飼育員が付き、絆をつくっていく。サルは上下関係を重視するので、飼育員以外とは仲良くなれない。
- ・ 幼齢のうちに同じ年くらいのサル同士をグループ飼養する。部屋のメンバー同士が群になるので、極端に部屋の入れ替えはしない。
- ・ 新しい個体を合流させると、先住サルが上位になる。なわばりは持たないのでパーソナルスペースはなく、空間を共有している。エサの取り合いで上下関係が浮き彫りになる。
- ・ 人に慣れるためのしつけは特別にはしていない。ミルクをあげている時点で人間と触れ合っているので自ずと慣れている。
- ・ 屋外飼養の場合、真冬には温度管理のために温風シートで小屋を囲う。屋内の場合、エアコンや扇風機を設置している。常に太陽光が入る屋根や窓を設置しているため、昼夜の光環境が自然環境と同じように維持できている。
- ・ 水ボトルから常に自由に給水できるようにしている。
- ・ オスは5歳頃から睨丸が下がり、メスは4歳頃から月経がはじまるので、そのころから繁殖可能になる。
- ・ ショーの引退個体は、終生飼養するため、カップルや複数頭で飼養している。



ヤギ・ヒツジエリア (触れ合い)



ヤギ・ヒツジエリア (シェルター)



ウサギ・モルモット (触れ合い)



カピバラエリア



カピバラ (触れ合い)



赤ちゃんサル・ウサギ (触れ合い)



サルエリア (子ども)



サルエリア (大人)

犬猫以外の哺乳類を扱う展示販売会【とんぶり市 2023】**○イベントの運営について**

- ・ 2023年10月1日 11:00~16:00 東京都立産業貿易センター台東館

○現状について（その他哺乳類）

- 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
- ・ 会場の騒音・振動の管理については、特段対策を取っていない。（取れないのが実情）
 - ・ 一般的に来場者が不快と感じない程度の温度（25℃前後、湿度は成り行き）を会場側の空調で管理頂いている。その上で、各種類の特性に応じて出品者が保温器具（ホットスポット、パネルヒーター等）を準備している。
 - ・ 出品者との展示・販売時のルール認識合わせ、輸送後～展示までの動物の健康・安全の管理等については、申込時に弊社ホームページよりイベントの主旨を確認させ、同意の上、申し込みをさせる。
 - ・ 初出品の方には申し込み後のやりとりで遵守事項を説明する。
 - ・ 最後に各出品者に最終案内メールを送信し、情報共有及びルール遵守を指示している。
 - ・ 違反が見つかった場合は、次回以降の出品を断るなど、厳しい措置を取ることにより、ルールを徹底している。
 - ・ 法令遵守を条件に出品者に周知しており、23年間運営しているが、大きなトラブルはない。

犬猫以外の哺乳類を扱う観光牧場【有限会社滝沢牧場】**○施設の運営について**

- ・ 入場料無料、乗馬 1,200~4,500 円
- ・ 営業時間 9:00~18:00 (季節によって 17:00 まで)
- ・ 動物種：ウマ、ウシ、ヤギ、ヒツジ、ポニー、ブタ、ウサギ等
- ・ スタッフ数： 15 名 (パート・アルバイト込み)、うち 10 名程度が住み込み

○現状について (その他哺乳類)

動物取扱業における飼養管理基準 (犬猫以外にも適用される定性基準) の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- ・ ウマは一頭当たり縦 2.7m×横 2.7m としているが、大きいウマだと少し狭く感じる。大体のウマは方向転換を自由にでき、一回寝ても起きられるような大きさとなっている。
- ・ ポニーではウマのような広さは必要なく、もっと小さなスペースで良いと考えている。
- ・ ヤギは数頭を運動一体型スペースにて飼養している。
- ・ ヒツジは現在 2 頭で、運動一体型スペースにいる。
- ・ ウサギは触れ合いコーナーに 5 羽程度いて、屋外スペースとシェルターが併設されている。その他に、調子の悪い個体や喧嘩をしてしまう個体は個別ケージに入れている。触れ合い動物は、嫌な場合には自らシェルター部分に常に逃げられるような状態にしている。
- ・ ウシは牛小屋の中に 10 頭程度入れており、自由に放牧スペースにアクセスできる。
- ・ ウマや他の動物は毎日水を取り替えている。給水はどの動物も基本的に水入れの水を絶やさないように入れている。
- ・ 山岳地帯なので夏は涼しいが冬は動物も寒い。ウマやウサギにストーブを使ったりもするが、動物は環境に適応するので、寒さで死ぬといったことはこれまでない。
- ・ 光環境は特別意識していないが、どの動物も窓や柵から自然光が常に入る状態となっている。
- ・ ヤギのエリアには岩山のようなところを作っていて、好きに登れるようにしている。ウサギは干し草やワラを置いているのと、パイプのような工作物を置いている。
- ・ ヤギやヒツジは脱走したとしても遠くに行かないが、ウサギは逃げると野犬や

カラスに攻撃されたりも昔にはあったので、天井をつける、二重扉にする、土を掘れないようにコンクリートの上から敷料をつめる等の対策をしている。また、ネコが侵入するのを防ぐために電気ロープを張ってある。

- ・保健所の見回り等もあるので、記録しないといけない動物はしている。繁忙期は思うように清掃に手が回らないので、常に清潔な状態を保つのは大変。
- ・動物の体調が悪くなった場合、ウサギや鳥など小さな動物は病院まで連れていくが、ヤギやヒツジ以上の大きさの動物は獣医師に来てもらう。
- ・新しい子が来た時にはまず相性を見る。ウマは性格が合わないと蹴り合いをしたりする。同じケージに入れてみて、相性が合わなかったら隔離する。病気の子も隔離する。
- ・ヤギはオスメスで分けたり、近親交配にならないようには気を使っている。その他の動物は、積極的に繁殖をさせているわけではなく、自然に任せている。
- ・大体の出産は動物自身に任せるが、助けが必要なら助産する。難産のケースは獣医師を呼ぶ。明らかに不健康で繁殖にふさわしくない子は隔離等をしている。
- ・朝晩で餌をあげているが、お客さんが多く、たくさんのエサやりが想定される場合には朝の餌を抜いたりしている。動物の体調が悪い時にはエサやりできないように施錠することもある。
- ・常にスタッフで触れ合いを監視することは難しい。学校の団体が来る時には案内として指導をするが、それ以外の来訪者すべてへ対応することはしていない。教育酪農ファームの決まりに従って、手洗いなどは徹底させている。
- ・慣れている動物同士を一緒にすることは、日常のおこなっている。馬小屋のところには犬とウサギもいて、たまに野良猫も入ってくるが、お互いに慣れているので問題は起こらない。
- ・個別ケージで飼う場合にすべてを運動スペース一体型にするのは難しい。個別ケージ+運動スペースでの運動時間の確保で対応する。
- ・どの動物も基本的には糞を敷いておけば問題ないと思う。動物種ごとに床材を具体的に決める必要はないと思う。
- ・動物園とは違うので一頭ずつ手をかけきれない。入園料もいただけないし、小動物関係はお金にはならないので、世話のスタッフ数を厚くすることはできない。馬係のスタッフが時間の合間を見ながら他の動物も世話をしているので、一日当たりの時間を算出するのは難しい。
- ・営業時間の9時~17時の間に展示をしているが、それぞれ休みたい時に自由に休んでいるため、展示時間=休めない時間ではない。特別休憩用のスペースを設けているわけではないが、それぞれの寝るスペースは確保してある。営業時

間は9時～17時なので夜間に訪問者が来ることがない。

- ・乗馬体験に供するウマについては、何時間というほどではないが、追い運動とか、乗り運動とかで体をほぐしている。初心者ばかりが乗っているとウマの走行感覚が悪くなってしまうので、定期的にスタッフが乗るようにしている。
- ・特に社会化期間は決めていない。動物は時期が来れば自然に離乳する。ウシは搾乳する目的があるため、初乳は飲ませるが、すぐに親から離して人工哺乳に変える。
- ・ウマは噛む癖があるので、その場合には馬小屋に「僕は噛みます」といった注意書きをしている。あえて、人になつかない個体を触れ合いに供しないということはない。ヤギは給餌体験があるので、当たり前のように懐いている状態である。



馬小屋（外部）



ウシエリア



馬小屋（内部）



馬小屋（内部・ポニー）



ブタエリア



ヒツジエリア



ウサギ (触れ合い)



ウサギ (個別飼養)



ウサギ (触れ合い・シェルター内)



ヤギエリア

犬猫以外の哺乳類を扱う卸売【浅田鳥獣貿易株式会社】**○施設の運営について**

- ・ 営業時間は 09:00-18:00。
- ・ 哺乳類は、ハムスターが 1,000 匹程度、モルモットが 50-60 匹程度、ウサギが 30 羽程度おり、常に仕入れと販売を行いながら回転しているため、長期で飼養するものは基本的には無い。

○現状について（その他哺乳類）

- 動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について
- ・ 現行の飼養管理基準をできる限り遵守しているが、扱う種類や数量も多く、その習性も多岐にわたる為、飼養管理において最低限の基準をクリアする程度かと思う。
 - ・ ケージ等については、できる限り多頭飼育にならないよう努めているが、例えば幼齢期においては、むしろ複数飼育のほうが良い場合もある等、動物の成長に伴い臨機応変に対応している。
 - ・ 給餌給水は常時置いてあり、毎日 1 回以上変える。動物の種類に応じて隠れ家等の設置、換気扇及びエアコン等による温度管理、窓からの採光、小さなカメラ等には必要に応じて UV ライト等を使用する。ハリネズミ等、アフリカの動物や幼齢な個体は暖房エリアで飼養する。幼齢な子は給水トレイで濡れて体温が下がってしまうので、給水ボトルを使用する。
 - ・ 以前エンリッチアイテムによる事故があり、ハムスターはアイテムを入れない方が多い。目視で状態を確認するためにできるだけ見えるような状態にしている。
 - ・ 登るのが好きな爬虫類には木の枝などを置いたり、給水のためにキャベツに水滴を垂らしてある。
 - ・ 昼間にシェルターを設けなくても、それほど夜行性の動物に影響はなかった。神経質な動物はシェルターをいれて外の影響を防ぐ。
 - ・ 全ての部屋に窓があり、18 時半くらいには電気をきって、外の光環境と変わらないようにしている。夜間の訪問はほとんどないため、消灯状態は維持されている。
 - ・ 逸走防止のため、ケージには動物の力で開かないようなロックがついている。施設は二重扉としている。夏に網戸を使うときは特に逸走に気を付けている。
 - ・ 衛生管理については、定期的な清掃を行っているが、清掃することで動物にス

トレスがかかる場合もあるので、対応が難しい。ゴキブリ等の害虫も殺虫剤等を用い、頻繁に対処を行っているが、なかなか追いつかないのが現状。

- ・健康管理については、基本的には日々の目視観察と、食物管理や温度管理で健康維持に努めている。調子が悪い時には隔離したりする。必要に応じて獣医に診察及び治療してもらう場合もあり、必要に応じて獣医より処方された薬を投薬する。
- ・個体別の帳簿管理の実態はない。健康管理は直接目視で状態を見て、餌の減り具合、糞の状態を見る。哺乳類の健康状態は、毛づやや動きが悪いことなどで確認している。簡単につかまってしまう個体は動きが鈍いので具合が悪いのかなと思う。
- ・基本的に幼齢期の動物は複数飼育を行っているが、成長に伴い怪我のリスクも高くなる為、徐々に少数で飼育することを心掛けている。飼育所内で繁殖した個体に関しては、生まれた仔が自立するまでは親子で同居させる。
- ・展示方法については、齧歯類、その他の哺乳類、食肉目、鳥類等、種類による展示位置の区分け、また食性や昼行性／夜行性等の習性に伴う展示場所への配慮も行っている。
- ・飼養管理をどう取るかだが、最低限の餌・水・掃除であれば、100匹いても半日かからない。もう一步踏み込んで、健康管理までと言われると、きりがなくなってしまうので、どこまでを飼養管理とするか。数量が多い業態だが、朝9時から夕方18時まで1日8時間で2~3人で見ている。
- ・輸送については、飛行機の場合は羽田から現地につくまで計6時間もかからない。その間に入れっぱなしになる。出し入れの時は目視するし、客には受け取ったら報告いただくようにしており、確認書を運用しているので、飛行機はほぼ事故もない。あまり早くから梱包しすぎないようにして、お客様にはなるべく早く開封するように依頼している。
- ・輸送中の水分補給として、リンゴを切ったもの、葉物野菜、ゼリー等、水の代りになるものを入れている。夏場はペットボトルを凍らせたものや保冷剤を付けている。真冬は使い捨てのカイロを付けている。
- ・非意図的に繁殖した場合は、お腹が大きくなってきたら隔離するなど対応をしている。意図的に繁殖させる場合には、大前提として性成熟しているかが基準となる。



ハムスター



モルモット



シマリス



ウサギ



デグー



チンチラ



全体



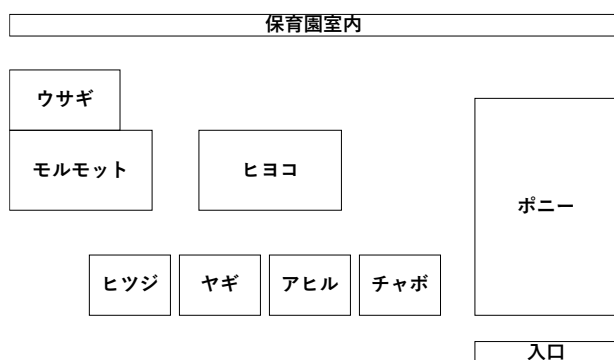
ハリネズミ、フクロモモンガ
(暖房エリア)

犬猫以外の哺乳類を扱う移動動物園【株式会社福田牧場】

○移動動物園の運営について

- ・ 飼養施設：ウシ 10 頭、ポニー4 頭、ヤギ 22 頭、ヒツジ 18 頭、ウサギ 80 羽、モルモット 170 匹、アヒル・カモ 25 羽、チャボ 20 羽、ヒヨコ 80 羽、リクガメ 3 頭
- ・ 移動動物園：ポニー1 頭、ヤギ 1 頭（メス）、ヒツジ 2 頭（メス）、ウサギ 6 頭（メス）、モルモット 15 頭程度（メス）、ヒヨコ 15 匹程度×2 ケース

< 保育園における移動動物園開催時の動物配置図 >



- ・ 酪農は先代から始めて 70 年、触れ合いは 35 年程続いている。
- ・ 10 月から 12 月は繁忙期なので平日は連日予定が入っていることがある。
- ・ 園児は 0 歳から触れ合える（今回は 0 歳～5 歳までの 6 クラス交代制）。
- ・ 移動動物園には、同じ種類でも連れていく個体は連続にならないように変えている。基本オスは臭ったりするので連れて行かない。また、オスはメスを守ろうとして攻撃的になることもあるため、繁殖のシーズンはオスだけのグループにすることもある。
- ・ 移動動物園は 1 回 2 時間程度。
- ・ 以前はウシやブタも連れて行っていた時もあったが BSE や豚熱等の伝染病の影響で防疫のため今は行っていない。ブタは人気だったが飼育自体も止めた。
- ・ スタッフは 6 名。スタッフ内に獣医がいるので、ウサギやモルモットの去勢や、ケガの手当て、助産等も牧場スタッフで行なうことができる。
- ・ 移動動物園では、ポニーはバケツを置いて何度か給水させる。ウサギとモルモットは、触れ合い中には水が無いが、休んでいるときにケージで水をあげる。常に水があると子供が水遊びをしてしまうのでケージの中であげている。ふれあい時にエサの野菜からも動物たちは水分を摂れている。
- ・ 移動動物園でも、夏場（6～9 月）の気温が高いときは扇風機とテントを持っていく。テントは 4～6 本、扇風機は 2～3 台、またペットボトルに水を入れて冷やした氷も持っていき暑熱対策を行っている。8 月などの真夏は移動動物

園の仕事は控えている。

- ・移動動物園のスタッフは2～3名体制で行なっている。園児は先生、動物は牧場スタッフが見る。
- ・移動動物園用のトラックは3台あるので、多くて1日3ヶ所までは行ける。3ヶ所行っても、毎日連続にならないよう、1日は動物が休めるような数を飼養している。

○飼養施設について（その他哺乳類）

動物取扱業における飼養管理基準（犬猫以外にも適用される定性基準）の遵守状況及び業種、業態、動物種ごとの飼養管理方法に関する懸念・指摘について

- ・ウサギは7～8羽毎を1グループにして分け、サークルに入れて10グループ飼養している。特に運動スペースは設けずその中で跳ねる等の軽い運動をしている。1グループが10羽を超えると多すぎる。
- ・ヤギは柵の中にメスを複数頭入れて繋留して飼育している。オスのみ別の場所に繋いでいる（オスは繁殖用に借りている個体。近親交配を防ぐためにオスは借りてきている）。
- ・ヒツジはウサギの隣のスペースで複数頭まとめて飼養している。
- ・モルモットも10匹程度を1グループにして、6グループ飼養している。
- ・水の取り換えはすべての動物が1日2回（朝晩）。
- ・飼養施設では、ウサギやモルモットは常に専用ペレット等の餌と乾草、水が置いてある。ポニー、ヤギ、ヒツジも水と、乾草を食べられるようになっている。
- ・依頼があれば遠方に行くことにもあるが近場の依頼が多い。最長2時間程度のところまで行くこともある。2時間の間には休憩は設けない。
- ・今は夏なのでシェルターを置いていないが、冬は置いていることもある。
- ・夜は遮光のためサッシを閉めたり、モルモットの所はすだれやカーテンで調整する。基本的には自然光が入るようになっている。
- ・動物の温度を気にするのはヒヨコとリクガメ。寒くなるとウサギやモルモットは皆でかたまって暖を取るので、藁を厚めにしく程度で、そのほか特に温度調整などはしていない。ペットのウサギは温度調整されて飼育されているが、福田牧場では移動動物園に行くので外気で耐えられるようにそうした環境で飼育している。夏場の方が温度調整は難しい。施設内で扇風機を回し、業務用の冷房装置も付けている。
- ・モルモットには逸走防止措置およびカラスや野良猫が危害を加えないようにとして全体的に網を張っている。夜の9時頃には全体の動物の見回り。首の引っ

掛かりなどがいないかで全ての動物を見て回り安全確認を行う。

- ・動物はローテーションで移動動物園先へ連れて行くので、ヤギは管理しやすいように首輪をつけている。ヒツジは耳標で個体確認を行う。
- ・ポニー、子ウシ、ヤギは定期的に運動スペースに放して運動させる。気分転換のために広いところで遊んでもらうため。
- ・ウシ、ポニー、ヤギ、ヒツジの掃除は毎日最低1回おこなう。季節によって異なるがウサギ・モルモットは週1回以上行う。
- ・すべての動物について毎日個体ごとに健康チェックを実施している。給餌の中で、異常や食べ方を観察する。そうした異変は業務日誌で記録し、スタッフ全員で情報共有を行う。移動動物園に連れていくときも個体を見て抱いてしっかりと全身をチェックして連れていく。調子の悪い個体は隔離する。
- ・調子の悪い様子は、エサの食いつき、鼻の状態、目の状態、毛並みなどをみている。
- ・医療アクセスは問題なく、スタッフに獣医師がいることと、近隣の大学の獣医学部の先生等が訪問に来るのでアドバイスを頂ける。
- ・帝王切開はめったにないが、スタッフに獣医師がいるので対応できる。その他の助産は他のスタッフもおこなえる。
- ・ウシは年に3回、ウマは約2か月に一度削蹄するため削蹄師をお願いしている。その他の動物はスタッフが爪切りや毛刈りをおこなう。
- ・ウサギをグループ飼養する際は、同時期に生まれた同じサイズの者同士で集める。体の大きさができてしまうのを防いでいる。
- ・移動動物園のための動物では、繁殖を頻繁にはおこなわない。頭数を常時把握し、必要があれば移動動物園の状況を見て、動物に負担にならない時期に繁殖を行う。
- ・動物種同士の相性は、個体の特性もあるため、複数飼養については臨機応変に対応する。例えば同じヤギでも大人しいものとそうでないものがある。
- ・動物1頭当たりの世話に要する時間は大きい個体と小さい個体でも違う。ウサギ80羽、モルモット170匹の世話は、慣れていけば水と餌だと30-40分程度である。
- ・仕事の内容のマニュアルを作成し、仕事を共有することでスムーズに作業を行える。朝は6-7時半、9-12時、15-17時半というシフト時間の中で、皆で分担している。現在の飼育状況では、すべての動物の世話を行うのに搾乳を含めて最低限2名必要である。野生動物が鳥インフルエンザなどの伝染病を媒介することもあるので野生動物の侵入を防ぐ工夫をしている。またそういった工夫を

効率的に動線ができている状態は前提である。



移動トラック



準備



ウサギ (触れ合い)



モルモット (触れ合い)



ポニー (触れ合い)



ヤギ・ヒツジ (触れ合い)



ヤギ (飼養施設)



ウシ (飼養施設)



ウサギ (飼養施設)



モルモット (飼養施設)



ヒツジ (飼養施設)



ポニー (飼養施設)